

生物多様性国家戦略の見直しに関する懇談会 第2回会合（発言概要）

平成18年9月26日 14:00～17:00

出席委員：石坂座長、岩槻委員、小野寺委員、林委員、鷲谷委員

ゲストスピーカー：兵庫県立大学 坂田氏、北海道大学 桜井氏

（野生生物の保護管理について）

- ・特に大型動物については、数十年というより地球史、人類史といったタイムスケールで、状況の把握と将来に向けた予測評価を行い、それに基づく対策を考えていくことも必要。
- ・問題解決のためには、現在の「個体群の管理」だけでなく、長期的に「環境収容力の管理」を考えることも必要。
- ・人間による土地利用の分類と野生生物の生息の場としての条件は一致しない。例えば、「荒地」には、生物にとって豊富な餌がある場合もある。環境省の自然林、二次林、草原などの分類を生物の側の視点も含めてもっときめ細かく分けるなど、データをしっかりさせて土地利用を考えることも必要。
- ・狩猟者は減り、高齢化しているにもかかわらず捕獲頭数が増えているのは、シカ、イノシシ等の生息数が増えているということ。
- ・利用しつつ管理するというエコシステム・アプローチ的な考え方は重要であり、その意味でイノシシは資源として大事にされているのではないか。大型獣は商品価値を高めながら一定のコントロールを行い、少なくなれば規制するというシステムも必要。クマは猟友会の自主規制から禁猟になったが、規制のためには客観的データをもとに合意形成を図ることが重要。
- ・新・生物多様性国家戦略の見直しを考える場合、「3つの危機」への対応としてどのような施策が実施され、野生生物にどう影響を与えてきたかを説明することが必要。
- ・かつて野生生物と共生できてきたわが国だが、今や里地里山問題としての「第2の危機」を迎えている。今後どう対応するかは、国土のあり方を100年なり長期でみたうえで次の5年でもなにかをやるか考えることが重要。
- ・これまで生活の中で経済的に成り立っていた里地里山の管理が崩壊している。これからは生活の中での管理は期待できず、ボランティアも主に都市近傍という中では、「生活」ではなく「知的」対応が必要。
- ・野生動物と人の生活との境界は長くなり、守る側は高齢化し疲れている。どれくらいの労力を里山の管理、野生生物の管理に割けるかも考えた上で、人と自然の関係の再構築、すなわちお互いの領域の再整理が必要だが、現実には簡単ではない。
- ・保護増殖の取組は、本来生息地の保全が重要なにもかかわらず、個体数を増やすことばかりが目されるという問題がある。
- ・これまでの自然保護行政の基本的な考え方は、自然環境や野生生物が一方的に後退する中でどう対処するかであったが、現在起きていることは全く逆の現象。それをどう見て、次の何十年かでどう施策にしていくか方向性を決める必要がある。戦略見直しの中での生物多様性の理念の再整理とも関わる問題。

（沿岸・海洋域の保全について）

- ・漁獲の対象となっていないものも含めた多くの種を保全する海洋保護区を設定することで、そのまわりで漁業資源も増えて漁業にも寄与できると考えることも必要。
- ・MA（ミレニアムエコシステムアセスメント）では、漁業資源の持続性が問題となっている。例えば、ウナギは完全養殖できず、しらすウナギの資源量に頼っているが、自然の恵みはずっと利用するためにも生物多様性保全を掲げた海域保護の考え方は必要。
- ・生物多様性を国際的視点で考えること、特に地球温暖化との重ね合わせは避けて通れない問題となるが、桜井氏が紹介された海での知見が、陸域を考える場合のヒントになるのではないか。